

目録史私見

森川 彰 (梅花女子大学)

昨年10月発行の書物を取り上げ、そこから更に遡って考えるといえ、もはや「ニュース・レター」の範囲を踏み外し、ことは旧聞に属すると断っておかねばならない。

書物というのは『目録の歴史』(渋川雅俊著 勁草書房 1985)を指す。すでに、高鷲忠美氏の書評が『図書館界』(38 卷1号)に載せられおり、それをも通して、同感するところ、また、思い及ばなかった点など教えられた。それで、この目録史の専書が刊行された意義といったものを、まず考えてみたい。

もと本書は、慶応義塾大学における「図書・図書館史」講義のテーマとして取り上げられたもので、1972年というから十数年以前のことになるが、著者はそのさい、まようことなくこの目録の歴史を選んだという。それが、図書館員のアイデンティティを探るのに相応しいテーマだと考えたからである。いいかえれば、これは、図書館員の立場からする目録史研究の提唱であり、実践であると理解してよいであろう。こうして本書は、わが国における西洋目録史研究の最初の著書となった。

これを含めて、我々はいま3冊の目録史研究の著書を手にすることができる。『目録学』(倉石武四郎述 汲古書院 1973)『日本文献史序説』(和田万吉著 青堂書店 昭和58)、そしてこの『目録の歴史』である。初めの2冊を総称して仮に東洋目録史と呼ぶなら、まさに東西目録史を併せ見ることができるようになったわけで、今後の目録史研究の基盤をえたというべく、その意義は大きい。

第2点は、本書における写本資料の調査についてである。一体、西洋目録史研究の場合、わが国には、写本のまま伝存する目録が極めて乏しいであろうこと容易に想像がつく。これを克服するため、海外に伝存する資料に直接当り、検証した著者の努力は、当然のこととはいえ、評価されなければならない。以後この研究を進める場合の、これは確たる出発点を定めたことになるからである。その伝存が知られるにかかわらず、写本資料を避けて通るならば、もはや説得力を持ち得ないであろう。

だがしかし、ことは西洋だけにとどまらない。わが国においても同様である。早く昭和24年の『図書館界』(第2号)に、中村幸彦氏が「日本書目史の課題」

という一文を寄せ、“日本の書目史は殆ど未開拓に放置されており、その研究は殆ど第一歩から発足しなければならぬ”(中村幸彦著述集 第14巻 中央公論社 昭和58)として、写本のまま伝存する書目の捜査と、研究の不足を指摘しておられる。

今日では、かかる書目の所在は『図書総目録』にも多く収められ、あるいは翻刻、複製出版が行われ、また極めて研究の進んだ分野も見られるようになった。『江戸時代における唐船持渡書の研究』(大庭脩著 関西大学東西学術研究所 昭和42)など、その代表例であろう。しかし、各時代を通観する書目年表もなければ、新しい日本目録史の著述もまだ書かれていない。さきほど『日本文献史序説』をあげたが、同書の解説によれば、この稿の成ったのは大正7年の頃という。先駆的業績として必見の書に違いないが、補うべきところもまた多い。

ともあれ、この『目録の歴史』が、写本のまま伝存する目録の実地調査、研究の末に成ったものであることは、注目されてよいであろう。さらにいえば、こうした西洋伝存の目録が、今後マイクロ形態等によりどしどし紹介されることが、何よりも望まれるのである。資料としての性格、判読についての論議等が改めて起こってくるであろう。

では、中国目録史の研究はどうであろうか。周知のように、わが国におけるこの研究は、極めて高いレベルに達している。多くの先学による目録学の研究がそうであって—これを目録史にのみ限定するには異論もあろうが、目録史を離れてありえないことを思えば、まずはここに取り上げてよいであろう—さきの倉石氏の『目録学』のほか、内藤湖南氏の「支那目録学」(内藤湖南全集 第12巻 岩波書店 昭和45)、武内義雄氏の「目録学」(武内義雄全集 第9巻 角川書店 昭和54)、清水茂氏の「中国目録学」(世界古典文学全集月報 筑摩書店 昭和41・10~44・9)等の通史的なものから、『漢書芝文志』(鈴木由次郎著 明德出版社 昭和43)等の個々の目録に至るまで、目録史研究として最もすすんだ領域をなしていることは、改めていうまでもないであろう。

しかし、ここになお検討すべき問題があるかと考えている。それは仏教經典の目録(「経録」という)の存在である。

仏典が正史の目録中に収録されるようになるのは、『隋書・経籍志』が最初であるが、この傾向は、はやく『晋中経簿』に遡ることができる。一方、現存最古の経録が編纂されたのが、梁代僧祐の手になる『出三蔵記集』(「祐録」ともいう)で、以後50種に余る経録の編集が知られている。『隋書・経籍志』等の、いわばナショナル・ビブリオグラフィからみれば、専門分野の目録(専録)である

から、その限りにおいて見ればよいとも言えるのであるが、実はそうでない。子細にみれば、『漢書・芝文志』の流れに匹敵するほどの独自性を備えた目録なのである。仮に『漢志』と『祐録』を並べた場合、著録図書収集方式、目録編纂時の先行書、構造と形式、記述方法、用語の問題、そして後世への影響など、それぞれ特筆すべきものがある。独自性のみではない、関連性もまた見逃しえないのである。

果たして、経録の分野にあっても、『後漢より宋齊に至る訳経総録』（常盤大定著 東方文化学院東京研究所 昭和13 昭和48: 国書刊行会複製）、『経録研究・前編』（林屋友次郎著 岩波書店 昭和16）等の大著をはじめ、前述の目録学に劣らぬ研究が積み重ねられ、今日に及んでいる。

要するに、中国目録史には『漢志』の流れに立つ外典中心の目録と、専録とはいえ『祐録』の流れを汲む経録の二大潮流があることを、十分に考慮しなければならないのである。総じていえば、これまでの目録学の著書は経録のことを多く語らず、経録研究また、目録学にあまりふれるところがなかった。何よりも、両者の関係の詳細を明らかにすることから始めなければならない。勿論その試みも既になされつつあるが、今後に残されたところが多い。

いま一つ付け加えたいのは、目録編纂者としての「秘書監」の研究である。後漢桓帝のとき創められた秘書監の官制は、明代まで続いた宮廷図書館長の職名であるが、この制度とその人の研究は、目録史に欠かせない密接な関係を持つ分野である。例えば、魏中経簿を撰した秘書郎鄭默、晋秘書監荀勗、その他謝靈運、王儉、王亮、牛弘、陳啓等枚挙にいとまなしとって過言でない。それらを悉皆調査したうえ、目録とのかかわりを明らかにする必要がある。

同様のことは、経録編纂者についてもいえるのである。今日亡失して伝わらぬ梁阮孝緒撰『七録十二卷』の総序を記録して、この大要をいまに伝えている『広弘明集』の撰者道宣は、かの『大唐内典録』の撰者にほかならない。

中国目録史における如上の問題を明らかにすることは、実はわが国の目録史、ことに漢籍、仏典の目録史を考える上に重要な手掛りを提供することになるであろう。

最後に、目録史研究の際の視点について一考しておきたい。冒頭に引用したように、洪川氏は、図書館員のアイデンティティを探るに相応しいテーマとして目録史を選んだという。目録が、収集から保管にいたる図書館員の基本的仕事の、いわば凝集したものに他ならなからである。まことに当をえた視点といわねばならない。

これに対し、上にのべた東洋目録史の研究は、明らかに図書そのものに視点を置いた、いわば、図書のアイデンティティを確立するためのものといって差支えないであろう。図書の伝流、学問の淵源を明らかにし、テキスト批判を行うために目録の歴史を究めんとするもので、それは、図書館員の立場というより、むしろ専門学術の研究に従う人々、別言すれば、ユーザーの立場からする目録史研究とあってよい。中国学、仏教学、史学、国文学等の多くの研究者がこれに力を注いできた。概していえば、それらは、図書館員の立場からする研究より遙かに精緻かつ広範囲にわたるものである。

しかしながら、この二つの視点は、研究の実際にあって截然と区別しうるものでもなければ、況して、分離の方向にあるべきものでもない。相まって一層豊かな目録史となるべき視点であろう。

ともあれ、一冊の西洋目録史の出現が、我々の今後の研究に重要な一石を投じたことは、疑いえない。
(受理 61年10月8日)

事務局より

新入会員

ニュース・レターの原稿を求めています。図書館史文献の書評、紹介を中心に、図書館史についての短文を希望します。枚数は400字×12枚程度。掲載は、原則として原稿が到着した次のニュース・レターにのせることになっています。送付先は、

椋山女学園大学 図書館史研究会 川崎良孝 です。

「図書館史研究」(第4号、来夏刊行)の執筆申込の締切12月10日がせまっています。応募される会員は前号のニュース・レターの案内をもとに、申込んでください。

会員の岡崎氏から次のページのような呼び掛けがされています。是非御協力ください。なお名簿の配列は、国名によるABC順、各国のなかは研究者のABC順、研究者名・図書館史の研究機関名の索引とする予定。研究主題別の索引は今後の課題のようです。

図書館史研究者名簿の作成についてお願い 兵庫教育大学 岡崎義富
IFLAの図書館史Round Table において、図書館史研究者の国際的な名簿の作成が
企画中です。日本の研究者の調査をRound Table の座長Paul Kaegbein 氏(ケル
ン大学) から依頼されました。つきまして、下記事項についてお知らせ下さいま
すようご協力をお願い致します。(記入は英文とし、業績の本文が日本語の場
合には、末尾に(J) と記入してください)

1. 氏名 _____ 2. 職場名 _____

所在地 _____

3. 大学における職位・職名 _____

4. 研究・教育の領域 _____

5. 業績 イ. 講演・発表 _____

ロ. 図書 _____

ハ. 論文 _____

ニ. 印刷中 _____

ホ. 準備中 _____

送り先 673-14 兵庫県加東郡社町山国6007-109 (☎0795-42-3311)

兵庫教育大学 学校教育センター 岡崎義富

期限 11月20日